

# やまぶき

田舎の和算研究の個人通信

(題字 伊藤武夫氏)

## 4

### 「加須市の算額展」の見学

六月十五日に加須市の「キヤッスルきさい」で開催中の「加須市の算額展」を見学しました。昨年十月に車を買って替えてから初めての高速道路の利用。道順は単純なもので安安全全運転を心掛けた。加須市騎西は数学者「谷山 豊」を輩出した処という。谷山は、「フェルマーの最終定理」を解くために重要な鍵を握った「谷山—志村予想」を提出した、とキヤッスルきさいに説明があった。惜しいかな31歳で亡くなっている。

展示は加須市に残る算額と歴史がコンパクトにまとめられていた。非現存も含めると加須市には二十六面の算額があったとされるが、現存は少ない。展示されていた現物算額は「棘抜地蔵の算額」(明治六年三月、嶋田宇市郎円義門人の掲額、六問六名)と、「愛宕神社の算額」(平成三十年の複製、182×97cmの大型のもの、元は明治十三年四月、加庭国造道年門人の掲額、二十三問二十三名)でし

た。両者とも『埼玉の算額』にあります。「玉敷神社の算額」(大正四年掲額、本誌37号参照)と「大宮氷川神社の算額」はパネル展示でした。他に都築利治の免状や算盤・算木・都築利治肖像画などが展示されていました。また日本橋の「福徳神社の算額」(令和二年、内田圭一氏の奉納)のパネル展示もありました。もしかしたら展示されているかとも思っていた「医王寺の算額」はありませんでした。



棘抜地蔵の算額 (ガラス越なのでうまく撮れないが、かなり読めそう)

第79号 令和三年(二〇二二) 六月二五日  
発行者 東京都羽村市緑ヶ丘三〇二二二  
山口正義 (不定期刊行)  
電話 042-5555-4352  
Eメール hamuyama3212@kind.ocn.ne.jp  
ホームページ 「やまぶき 和算と歴史随想」

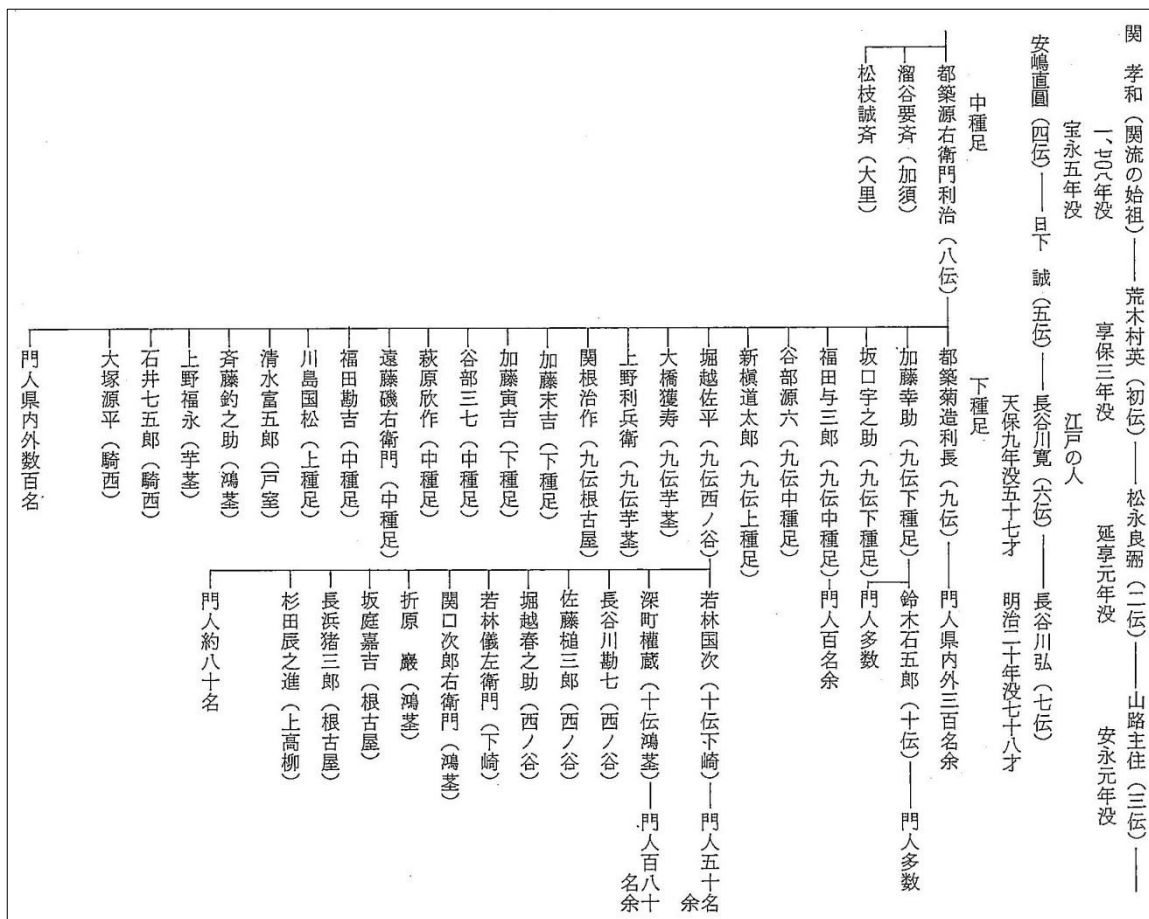
た(本誌37号参照、五年来の私の課題)。  
加須市の数学者の系統は、旧加須市が溜谷要斎(たがやよさき)、旧騎西町が都築利治(本誌36号参照)によって盛んになったといえます。ともに江戸長谷川道場で二代目長谷川弘に学び、明治十二年の『社友列名』には見題免許に「武蔵大越 溜谷興市郎教推溜谷興市郎者茂木万之助門人也後為直弟」および「武蔵種足 都築源右衛門利治」とあるといえます。『社友列名』は国会図書館HPで見られ私も確認しました。  
「棘抜地蔵の算額」が見られたのは収穫でした。小規模でもこのような展示がなされることに感謝し敬意を表します。  
なお、展示されていた『きさいの和算』(騎西町教育委員会、一九七八年)を騎西図書館で見ることができましたので、その中から都築利治の「入門のすすめ」と「騎西の和算家の系譜」を以下に示します。



都築利治肖像



愛宕神社の算額



騎西の和算家の系譜 (『きさいの和算』より)

都築利治の「入門のすすめ」(『きさいの和算』より)  
 算術順席傳法

夫先生諱利治号源右衛門姓都築氏本姓北埼玉郡大字下種足十五番地都築氏長男ナリ幼初ヨリ數學ヲ考へ甫テ七歳時爲人穎敏尤モ數學ヲ好ミ東京長谷川先生ニ随ヒ二十四ヶ年一ヶ月間晝夜研究天文地理ニ亘リ座ナカラ山河大地之廣狹ヲ量リ萬物數ヲナラシムル明算之妙術ナリ故ニ關流正統免許皆傳ノ許ヲ蒙リ諸學校算術ノ教授ヲ勤メ數多數學之順席授ケ方著明シ故ニ門人へ其秘法ヲ授ケ冀ハ將來算學懇志ノ諸君續々入門アランコトヲ企望ス  
 明治三十二年 北埼玉郡種足村大字中種足 都築源右衛門利治

順席傳法	開立方	勾爻玄
定例	帶縱開立	比例
算盤玉之位	相應開立	盈朒方□
加算	測量十字	繁比例
減算	間斜取	平均
乘算	小數位	差分
除算	大數位	方中門
四則合法	大數小數用位	三角門
加減乘除	算木用方	諸角門
見一割	天元	圓法玉法弧矢弦玉欠論
相場割	天元用へ方	適盡
利足	測量分見	剩一術
繁利	尺ノ	歎一術
利足損益	川測浚	諸約術
開平方	着積土榊	三斜術
帶縱開平	酒桶積ル	冪矩合術
相應開平	點竄	諸法

### 野口泰助先生を偲ぶ

野口泰助先生が昨年十一月に亡くなつてい  
たということを、最近知り、驚きと同時に誠  
に残念と思ひました。心よりご冥福をお祈り  
申し上げます。

先生は熊谷の人で昭和二年三月二十二日生  
まれと聞いていましたので、九十三歳と七ヶ  
月余りの人生でした。

先生の活躍の一端は「日本数学史学会発足  
までの思い出」『数学史研究』通巻80号、1979  
年1〜3月、創立20周年記念号」という短文  
をみるとわかります。要約は次のようなもの  
です。

・ 戦災を受けて仮住いが図書館前だったこと  
から図書館に勤める傍ら、「北武蔵の数学」(注  
三上義夫) から熊谷近郊に算額のあることを  
知る。

・ 24年古本屋で「算法新書」を物交で入手。  
休日に自転車で寺社の算額を調べ廻る。大谷  
恒蔵先生に指導を頂く。(大谷氏とは基本資料  
である『埼玉の算額』を昭和44年に著す)

・ 27年和算史同好者と「算友会」を発足。

・ 28年日本科学史学会入会。大矢真一先生ら  
と知り合う。

・ 32年和算雑誌「さん」を創刊。平山諦先生  
から資料の提供受け続ける。(同じ頃萩野公剛  
氏も算額調査で埼玉県内を廻っていた)

・ 33年10月20日関孝和二五〇年祭と墓前  
祭が開かれ、その後の懇話会で和算研究の  
同好会で装い新たに「算友会」発足(この  
時のメンバーは平山諦・細井涼・大矢真一・  
山崎与右衛門・下平和夫ら錚々たる人達、  
下の写真参照)

・ 34年4月機関誌「和算研究」創刊

・ 37年3月野口宅で算友会の編集委員会  
を開催時、「日本数学史学会」と改称。機関  
誌も「数学史研究」改題。

(現在に続いています)

このように先生は戦後の和算研究の草創  
期に重要な役割を担っていました。著書に  
は先述の『埼玉の算額』の他に『埼玉県数  
学者小辞典』(昭和36年)、『熊谷市の算額』  
『忍の数学』(共に昭和37年)、『和算と近世  
文化―知的な遊戯』(『和算の事典』に所収、  
2009年)、『江戸の寺子屋入門』(共著)等々  
があり、また『江戸初期和算選書』では編  
集を担当しています。計量器・珠算・作図  
などの調査研究も行つて資料化しています。

そして特筆すべきは和算資料の蒐集家でも  
あったということです。蒐集した史料・資料  
は図書原簿に整理されていて、その番号は  
472までを私は確認しています。その中に  
は、「算法求積通考」の草稿本や「算法闕疑抄」  
〔天和本〕、それに「算法開蘊附録解」〔算法  
約術新編〕などの剣持章行自筆本、それに地



この写真は昭和33年10月20日に撮られたも  
の。前列右より、大谷真一・細井涼・平山諦・  
同夫人・山崎与右衛門。安部元章・竹内乙彦、  
後列右より、下平和夫・萩野公剛・野口先生・  
鈴木久男・服部武雄・藤井長雄の各氏。野口  
先生から頂いた写真です。同じ写真が『日本  
数学の新知識』(昭和43年)の口絵写真にあり  
ます。和算研究の中では記念すべき写真です。

元の和算家の史料（例えば戸根木格齋の門人帳など）など和算に関する一級史料が沢山ありました。

私は先生の蔵書の整理で何か役に立ちたいと思い、図書原簿をもとに、書名から登録番号を検索できるようにデータを入力していましたが、あまりの多さに音を上げて途中段階でした。

地元埼玉の和算を勉強していると文献等に先生の名前がよく出て来ました。そんなことから拙著『飯能の和算家・石井弥四郎和儀』を贈呈させていただき、先生との出会いが出来ました。贈呈は二〇一二年の十二月頃でしたから、約十年前となります。

熊谷の和算家の事績を案内して頂いた他、藤沢の自宅に何回も尋ね、和算書を見せて頂き、また借用もしたりしました。先生は非常にやさしく、何でも見せて頂き、また貸しても頂きました。和算資料を入れた手紙は30通以上も頂きました。先生の足跡に驚くばかりか、高齢でも研究熱心でした。『北武蔵の和算家』では、先生から提供して頂いた資料を沢山利用させていただき完成することができました。出版するときには大変喜んで頂き、「推薦のことは」を頂きました。

先生に心から感謝申し上げます。

## 和算の研究

前章で引用させて頂いた『数学史研究』（通巻80号、創立20周年記念号）の巻頭言をたまたま読みました。当時の大矢真一会長の言で「我々の研究はどうあるべきか」というもので、その内容の一部を紹介したい。

『和算研究』から『数学史研究』に改名したのは西洋数学史の研究も取り入れる為だったが活動は充分ではなく、且つ日本の数学史も寄稿者が限定され、また内容が算額に限定される傾向がある」

・「その算額の研究で数学者の分布、伝播の経路、子弟関係、身分階級などの研究が出て来たのは貴重だが、算額の研究というと、その内容を現代式に書き直して、それで研究がすすんでしまったように考えている論文が多いようで、これははなはだ残念である」、「当時は三角法を使うことは希であった。微積分を使うことも少なかった。当時の人たちはそういうことなしに計算したのである。それを今日の人がそれらの算法を駆使して問題を解く」、「それは和算を材料として現代数学の演習をしていることで、和算を研究することにはならないとも考えられる。和算の計算の合否を考える一助になるかもしれないが、それをもって和算の研究の大筋とは考えられないのである」という。さらに、「算額の研究とい

っても、最近の研究の範囲が以前よりずっと広くなったことはたしかで、賀すべき傾向と言える。しかし、いつまでもこの域に止まるべきでないこともまたたしかである。和算の内容はもともとと広いのである。研究すべき事柄はまだ多い」という。

筆者も算額（あるいは和算）の問題を現代数学で解いただけでは片手落ちではないか、当時の解き方に言及すべきではないかと思っていたので意を得た想いです。難しいですが、また、和算の内容の広さについては文化史的に考えれば（例えば俳句を行うこととの類似性）、確かに様々な検討課題があると思います。42年前の言ですが今後の指針になるものと思えます。

## 編集後記

野口先生の逝去を知った日、高校の恩師と同級生の逝去も知った。何という日か。

見学や文献調査などが自主的にできる健康年齢は自分の場合何歳くらいまでか、と時々思うようになって来た。仮に八十歳とすれば、もうじき七十六歳の身では残された時間はあまりない。それに自分勝手な調査ばかりで良いのか、小さなことでも良いからもつと世の為人の為になることを行うべきではないか、とこの歳になって迷う。

忙しなく雲間を走る梅雨の月

（加藤正治様）